

要 旨

本研究は、要約の指導を工夫することにより、説明的文章を的確に理解する力を伸ばし、思考力、表現力を高めることを目指したものである。要約を生かす発信の場、要約のポイントの明確化、要約を練り合う相互交流の場の3点において手立てを工夫した。その結果、要約すること、更には説明的文章を読むことに目的意識が生まれ、説明的文章に対する学習意欲が向上してきた。また、要約の方法と、要約を評価する力が身に付き、自分の要約に自信をもつ生徒が増えてきた。さらに、要約をすることで、説明的文章を的確に読む力も高めることができた。

〈キーワード〉 ① 要約を生かす発信の場 ② 要約のポイント ③ 相互交流

1 研究の目標

説明的文章において、目的意識をもたせ、ポイントを明らかにした要約の指導を工夫することによって、文章を的確に理解し、思考力を高める指導の在り方を探る。

2 目標設定の理由

今日の急速に進む情報化社会では、大量の情報を目的に応じて処理する必要がある。そのためには、何を伝えたい情報なのか理解する力を身に付けなければならない。また、目的に応じて情報を再構成し、相手に伝える能力も重視されている。学校でも、インターネット等を用いて調べ学習が盛んに行われるようになった。

しかし、生徒が完成させたレポートを見ると、収集した資料を丸写ししているものが多く、内容をあまり理解していないというのが現状である。それは、文章を的確に理解する力、中でも、その文章の中で自分の目的に合う部分を取捨選択し、要約する力が身に付いていないためではないかと思われる。平成16年度佐賀県小・中学校学習状況調査でも同じ結果が見られ、「読むこと」の領域の通過率が他に比べて低く、最も低かったのは説明的文章での要約の問題であった。

それは、これまでの学習が要約のための要約に陥っており、何のために要約しているのかという目的意識が希薄だったことに一つの原因があると思われる。さらに、生徒に要約の方法が身に付いていないことも原因として考えられる。教師主導で手順を示されれば要約はできるが、自らの力で、他の文章の要約や、目的に合わせた要約ができていないのである。

これらの問題を解決するには、要約を生かす場の設定を工夫することで、要約の目的意識をもたせる必要があると考える。また、様々な文章に応用できるような要約のポイントを身に付けさせるための手立てを工夫しなければならない。

そこで、本研究では、説明的文章において、要約に目的意識をもたせ、要約のポイントを明らかにするための指導を工夫する。それにより、文章を的確に理解し、思考力、表現力を高める指導の在り方を探る必要があると考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

説明的文章での要約の指導において、次のような手立てを工夫すれば、文章を的確に理解することができるであろう。

- ① 学習意欲を高め、目的意識をもたせるために要約を生かす発信の場を設定する。
- ② 要約の方法を身に付けさせるために、要約のポイントの明確化を図る。

- ③ 要約を練り合う相互交流の場を設定する。

4 研究の内容と方法

- (1) 説明的文章における、要約指導についての理論研究
- (2) 要約を生かす発信の場を設定した単元の開発
- (3) 仮説検証のための授業実践（第2学年）及びその分析と考察

5 研究の実際

- (1) 説明的文章における要約指導について

要約は中学生が身に付けるべき力であるが、実際には不十分であることが指摘されている。中村敦雄は要約指導の問題点について「何のために要約をするのか、学習者はその行為自体から答えがつかみにくい」「要約をまとめる活動をともなった読みの方法論を教えていない」⁽¹⁾と述べている。これからの要約指導では、有用性や目的を意識させ、目的に応じた要約の方法を明確にする必要がある。中学校学習指導要領解説国語編にも『要約』の学習に目的や必要性を付与することにより、意欲的な学習活動が展開され、文章の内容を正確に理解しようとする能力や態度が一層確かに育成される⁽²⁾とある。機械的に要約を練習させるのではなく、読んだことを伝える活動の中で、要約に取り組ませる。その文章を読んでいない人に伝えるなどの目標を設定すれば、要約にも必然性が生まれ、正しく伝えなければという切実感は、確かな読みにつながるとともに、表現力も高まると考えられる。説明的文章を読んで終わる受信するための読みから、読んだことを伝えるような発信を前提にした情報活用の読みに転換する必要がある。要約の方法については、井上一郎が要約方法のルール化を提案しているように、要約の条件を明らかにし、どこに着目し、言葉をどう削り、つなげ、言い換えるかといった具体的な方法を明らかにすることが有効であると考えられる。

- (2) 実践化への手立て

ア 要約を生かす発信の場（図1参照）

要約を生かして相手に伝えることを目的とした発信の場を設定した。発信の場は、目的に応じて多様な形態が考えられる。設定する際には、単元の導入時に、具体例を教師が示し、学習の完成図をイメージさせたい。要約を生かした発信の場をはっきりと示すことにより、要約の有用性に気付き、要約の学習に対して意欲的になり、文章を読むこと自体にも目的意識が生まれるのではないかと考える。さらに、要約の前提として、文章を正しく読むことが必要となる。このように要約を生かす発信の場を工夫すれば、目的意識が生まれ、文章を的確に読む力と、相手に効果的に伝えるように表現しようとする態度が育成されることが考えられる。

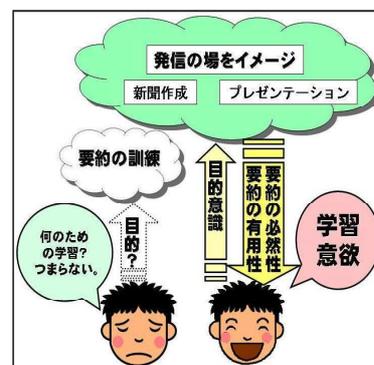


図1 発信の場の設定

イ 要約のポイントの明確化

要約を指導する際、「まとめなさい」などといった漠然とした指示では、どこをどのようにまとめればよいのか戸惑う生徒も多い。そこで、要約の具体的なポイントを明らかにして、定着を図りたい。説明的文章を活用し、発信するのに用いる要約を4種類示し、目的に応じて選択し、要約させることにした（表1）。何のため

表1 要約の種類

要約の種類	対象	読む力との主な関連
要旨的要約	筆者の主張	・ 筆者の主張をとらえる力 ・ 中心の部分と付加的な部分を読み分ける力
大意的要約	全体	・ 具体例の役割をとらえる力 ・ 段落の役割をとらえる力 ・ 文章構成をとらえる力
表題的要約	見出し 題名	・ 要点をとらえる力
解説的要約	キーワード	・ 事実と意見を読み分ける力 ・ 情報を整理する力

に、何をまとめるかによって要約の種類を意識させると、それぞれの具体的な要約のポイントが浮かび上がる。要約のポイントを明確にする際には、種類に応じた要約文モデルを示したい。教師の方から要約のポイントを教授するのではなく、要約文モデルから生徒自身が要約のポイントを探ることで、より明確に理解でき、定着につながるのではないかと考える。また、要約の種類に応じて、それぞれに異なる読む力が必要となる。その種類の要約ができたのなら、その要約に必要な読む力も身に付いたと言える。

ウ 相互交流の場 (図2参照)

これまでの要約学習では、生徒が要約した文を教師が添削することが多かった。それでは生徒の自己評価する力は育たず、自分の要約文に対して不安をもったままである。そこで、相互交流を通して、要約を推敲させる場を設定した。友達と要約文を読み合い、使用する要約のポイントを振り返り、より良い要約を目指す。これにより、要約のポイントの更なる定着を図る。評価する力を付け、要約に自信をもたせ、要約の技術を向上させることもできると考える。その際、直感的に評価するのでなく、要約のポイントを観点とさせる。根拠を明らかにして説明し合う場を設定することで、更に思考力と表現力を高めることもできるのではないかと考える。

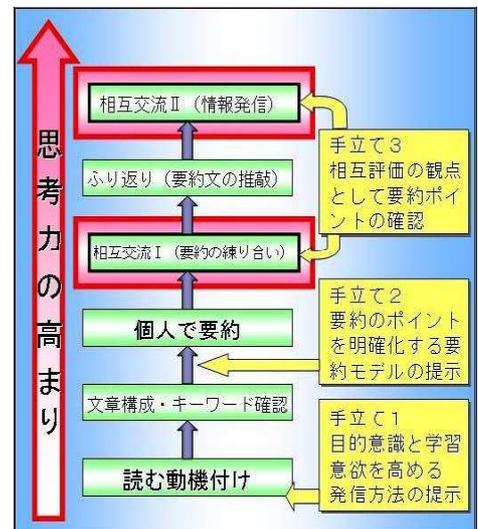


図2 相互交流を入れた単元構成

(3) 授業実践の結果と考察

ア 授業の概要

平成17年12月と平成18年1月に、3つの手立ての有効性を検証する授業を2年生で実施した。

(ア) 授業実践I 単元名 「モアイの主張を伝えよう」(図3参照)

教材文「モアイは語るー地球の未来ー」(光村『国語2』)を用いて、文章を要約し、新聞に再構成して、元の文章を読んでいない家族に伝えることを目標とする学習を行った。新聞形式のワークシートに、筆者の主張をまとめた要旨的要約とキーワードについての解説をまとめた解説的要約を記入させ、自分の意見を加えて新聞を完成させた。

(イ) 授業実践II 単元名 「江戸を伝えよう」(図4参照)

江戸の町人文化をテーマにした2作品「江戸の人々と浮世絵」(光村『国語2』)と『お江戸風流さんぽ道』抜粋(杉浦日向子著 小学館)のコース別学習を行った。2作品から班で1つ選択し、コンピュータのプレゼンテーションソフトを用いて、選択していない班に分かりやすくプレゼンテーションをすることを目標とした学習を行った。見出しとなる表題的要約と意味段落の要約を1枚のスライドにまとめさせ、大意的要約を使ってナレーションを行わせた。

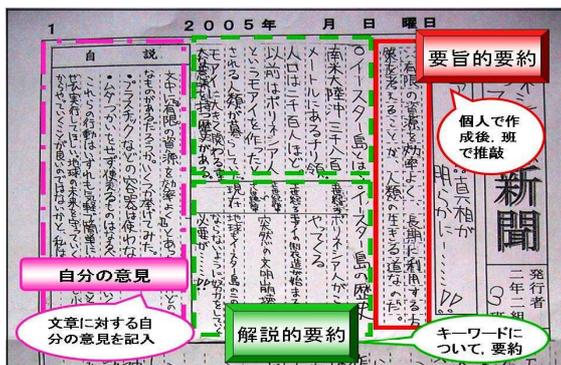


図3 授業実践I 新聞生徒作品

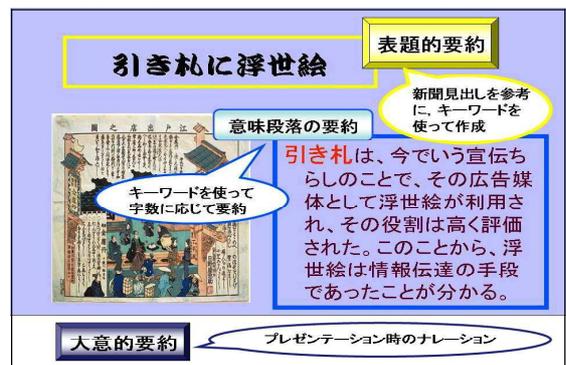


図4 授業実践II スライド生徒作品

イ 発信の場の設定について

授業実践Ⅰでは、教師が作成した新聞モデルを提示した上で、新聞形式のワークシートに要約文を記入させ、新聞を完成させた。34名中29名が「新聞作りは楽しい」と答え、意欲的に取り組むことができた。しかし、新聞の完成自体が要約の目的になっており、相手に分かりやすく伝えるという目的に対する意識は十分ではなかった。伝える相手を限定し、評価を返してもらうなど、伝える必然性があり、表現したいと思わせる発信の場を工夫する必要があった。

授業実践Ⅱでは、1年生での既習教材を用いて、教師が6枚のスライドを作成して提示した。生徒はプレゼンテーションという明確な目的意識をもち学習できた。文章を読んでいない班を伝える相手として限定し、伝える対象を常に身近に感じさせるようにした。発表での相互評価を予告しておくことで、「相手に分かりやすく要約しよう」という意識を高めることができた(図5)。

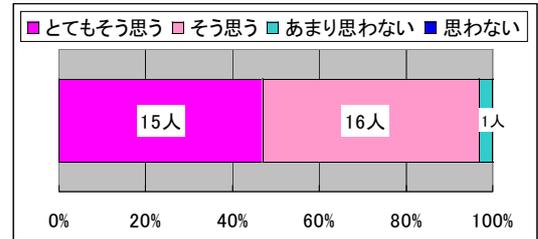


図5 授業実践Ⅱでの「相手に分かりやすい要約を心がけたか」に関する生徒の意識の割合

図6は、説明的文章の学習に対する意欲の変化を示している。事前調査では、説明的文章の学習に対して抵抗感をもつ生徒が多かった。しかし、要約文を生かした発信の場を工夫することで、分かりやすく表現しようとする態度が身に付くとともに、説明的文章の学習に対する意欲が向上していることが分かる。

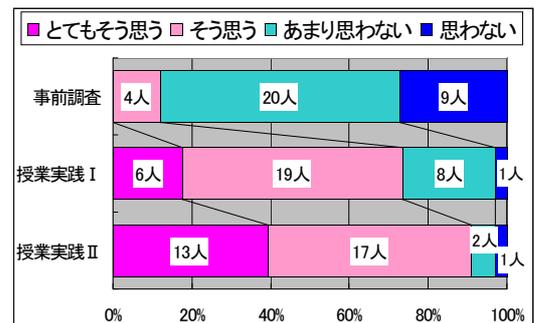


図6 「説明的文章の学習に意欲的に取り組んだか」に関する生徒の変化

ウ 要約のポイントの明確化について

授業実践Ⅰでは新聞形式のワークシートに合わせて、筆者の主張をまとめる要約(要旨的要約)とキーワードの解説をまとめる要約(解説的要約)に取り組みさせた。要約のポイントに気付かせるために、1年時に学習した説明的文章の教材文を用いた要約文モデルを示した。共通する言葉を見付けさせ、削除された部分、書き換えられた部分に注目させることで、生徒は、要旨的要約では9項目(図7)、解説的要約では5項目の要約のポイントを導き出すことができた。

要旨的要約では、「モアイは語るー地球の未来ー」の文章と字数制限において、必要な4項目以上の要約のポイントを用いた要約文を34名中25名書くことができた。特に、「結論を中心にまとめる」や「修飾語を削る」という重要なポイントを用いることができた生徒は29名に達した(図8)。要約によって、筆者の主張を読み取る力、文章の中心の部分と付加的な部分を読み分ける力といった文章を的確に読む力が身に付いたと言える。

- ① 結論を中心にまとめる
- ② 余分な修飾語を削る
- ③ 文末を簡潔にする
- ④ 1人称の主語は削る
- ⑤ 指示語に言葉を入れる
- ⑥ 漢語にする
- ⑦ 上位概念の言葉にまとめる
- ⑧ 比喩や慣用句を簡潔にする
- ⑨ 倒置法を使う

図7 要約文モデルを使用した要旨的要約のポイント

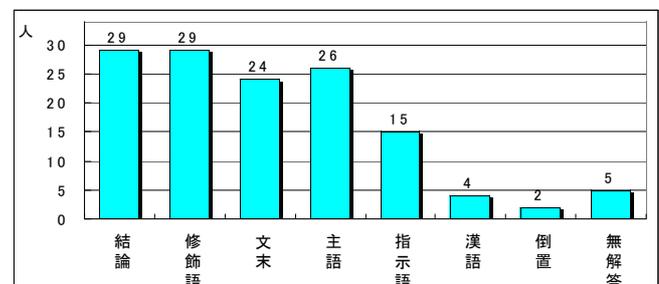


図8 教材文の要旨的要約で用いたポイント

解説的要約では、必要な4項目以上の要約のポイントを用いた要約文が書けた生徒は11名で、教材文を書き写しただけで、要約になっていない生徒が13名いた。解説的要約は、教材文全体から、キーワードに関する記述を探してまとめる必要があり、情報を集めて取捨選択する手立てを工夫す

る必要があった。

授業実践Ⅱでは、プレゼンテーションに必要な、文章全体をまとめる要約（大意的要約）と見出しの作成（表題的要約）に取り組ませた。大意的要約では、教師がプレゼンテーション提示の際に用いたナレーション（大意的要約を使用）を示し、要旨的要約との違いを考えさせながら、2項目の要約のポイントを導き出させた。表題的要約では、新聞の見出しや、写真キャプションの例を示し、特徴を考えさせることで、4項目の要約のポイントを導き出させた。

大意的要約では、まず、意味段落の要約を行った。この時点で、キーワード、字数、文法、正確な内容理解の観点から見て十分満足できる要約ができたのは32名中19名であった。2名は要約の条件を満たしていなかったが、無解答の生徒はいなかった。その後、班で要約を持ち寄り、不適切な意味段落の要約文には修正を加え、つなぎ言葉を用いて大意的要約にまとめさせた。21名の生徒が、適切な語句を入れて大意的要約を完成させた。段落と段落の関係、具体例の役割をとらえるといった的確に読むための力が身に付いたと言える。

表題的要約は、意味段落のスライドの見出しに活用させた。キーワードの使用と体言止めにするという限定条件、正確な内容理解の観点から見て、24名が十分満足できる要約ができており、無解答の生徒はいなかった。的確に読むための要点をつかむ力が身に付いたと言える。また、相手に分かりやすく伝えようとする意識の高まりから、スライド作成時に、キーワードの字体や大きさ、色を変えて強調する工夫をしていた生徒も11名いた。

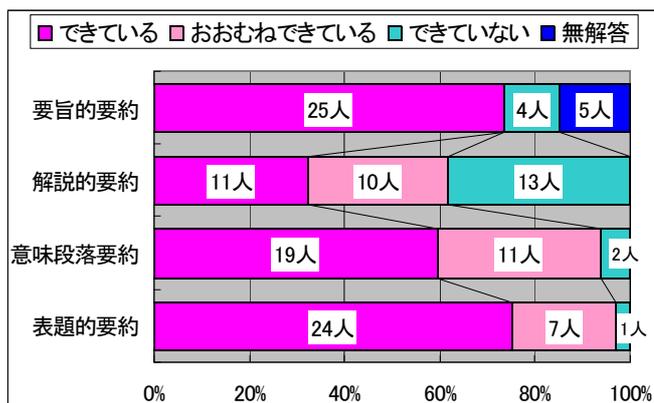


図9 4種類の要約文の分析

図10は、要約の学習に対する意識の変化を示している。事前調査では、要約自体の認識も低かったが、要約のポイントを身に付け、方法が分かることで、要約の学習に対する意欲も向上していることが分かる。要約の種類に応じて要約文モデルを示し、要約のポイントを明確化することは要約の技術や文章を的確に読む力を身に付ける上で有効であり、「できた」「分かった」という自信が、学習意欲にも結び付いたと言える（図11）。

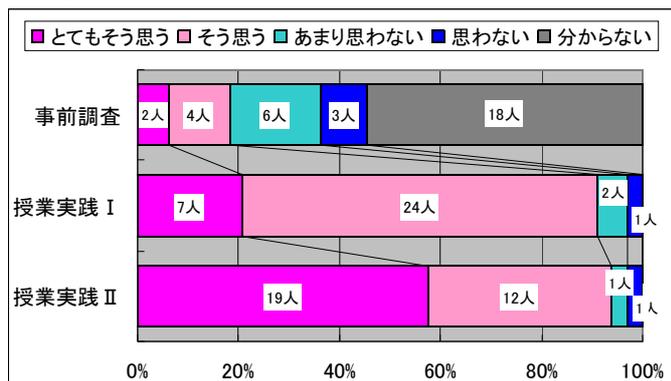


図10 「要約の学習は好きか」に関する生徒の意識の変化

- ・ 文章を要約することがとても簡単で身近に思えた。
- ・ 社会に生きる中でとても大事だと思った。
- ・ 要約を利用して良い新聞ができた。
- ・ 要約は他にも活用できそうだ。
- ・ (要約の) ポイントをつかむと要約が簡単になった。
- ・ 要約の種類が増えて逆にやりやすかった。
- ・ 要約に取り組むことによって内容がもっと分かるようになった。
- ・ 要約をすることで説明文が分かりやすく読みやすくなるから良かった。

図11 要約の学習についての感想

エ 相互交流の場の設定について

授業実践Ⅰでは、要旨的要約を個人で書いた後、より良い要約に練り合うために、班での相互交流の場を設定した。その結果、自分が使っていない要約のポイントを確認し、29名が「班の交流によって要約が良くなった」と答えている（図12）。次頁表2は、抽出生徒の要旨的要約の変容であるが、要約のポイントを多く活用しようとする意識することで、具体的な修正点に気付いている。使用した要約

のポイントの数で自分の要約文を客観的に評価していた。

表2 授業実践Ⅰ 相互交流を通じた要約的要約の変容(図7参照)

抽出生徒A	使用したポイント	抽出生徒B	使用したポイント
今ある有限の資源を長期間にわたって使う方策を考えることが人類の生き延びる道なのである。	①②④⑤	今ある有限の資源を効率よく長期間にわたり利用すべきだ。それが生き延びる道だ。	①②③④
交 流		交 流	
今ある有限の資源を長期間効率よく利用する方策を考えることが人類の生き延びる道だ。	①②④⑤ +③⑥	人類が生き延びるためには、有限の資源を効率よく利用すべきだ。	①②③④ +⑤⑨

授業実践Ⅱでは、相互交流の場を3回設定した。まず、意味段落の要約文を相互推敲し、過不足を補い、要約を練り合った。大意的要約にまとめる際に、なぜそのつなぎ言葉を用いたのか、根拠を明らかにして説明し合う中で、段落相互の関係をとらえることができた。発表の場面では、要約の相互評価をすることができた。また、他の班の発表も見ることで、効果的な表現方法や自分の要約文を振り返り、要約のポイントも、より強く定着させたと考える(図12)。

要約文を用いて他者に発信する前段階で相互交流をすることで、要約文の評価ができ、自信をもつことができたようだ(図13)。要約のポイントを具体的な観点としながら、相互交流を行うことは、要約する力を付け、文章を的確に読む力や表現力を高める上でも有効であると言える。

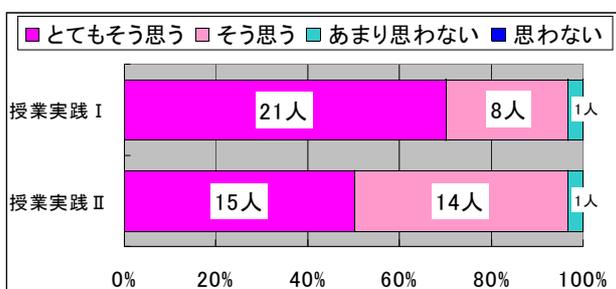


図12 「相互交流で要約が良くなったか」に関する生徒の変化

- ・ 皆の要約の方法が分かって意見交換ができて良かった。
- ・ 班の人と意見を交換して、その意見を取り入れられて良かった。
- ・ 班での話し合いができるので分からないことがあった時、すごく良いです。
- ・ 班で話し合うことで説明的文章の読み方が分かった。

図13 相互交流についての感想

6 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

- ア 要約を生かす発信の場を設定することにより、要約することや文章を読むことに目的意識が生まれ、分かりやすく表現しようとする態度が身に付き、説明的文章の学習意欲が向上してきた。
- イ 要約文モデルを提示することにより、生徒自ら要約のポイントに気付き、それらを活用して要約させることで、要約の技術が向上し、説明的文章を的確に読む力も高めることができた。
- ウ 相互交流を設定することにより、要約の技術と的確に読む力が更に向上してきた。また、根拠を明らかにして話し合うことで、思考力、表現力を高めることができた。

(2) 今後の課題

- ア 自分の意見に説得力をもたせるような情報活用としての要約指導の在り方を探る。
- イ 発達段階に応じた段階的、系統的な要約指導の在り方を探る。

《引用文献》

- (1) 中村 敦雄 『『要約』そのものの意味を問い直す』『教育科学 国語教育』 2001年7月号 明治図書 p.14
- (2) 文部科学省 『中学校学習指導要領解説－国語編－』 平成11年 東京書籍 p.51

《参考文献》

- ・ 井上 一郎 『読む力の基礎・基本－17の視点による授業づくり－』 2003年 明治図書